IMAJ ニューズ
NO.17
国際MRA日本協会機関誌
発行年月日　昭和 53 年 12 月 10 日
発行所　国際ＭＲＡ日本協会
発行者　柳沢錬造
（非売品）　TEL. 03－374－7600
INTERNATIONAL MRA ASSOCIATION OF JAPAN

世界の叡知を集めて講演する中島正樹氏（1978年コー）

生活に生かされたデモクラシーを求めて

この夏、コーのＭＲＡ世界大会に百七十人を送り込んだアメリカ、カナダのデモクラシーはダイナミックであった。白人、黒人、インディアンで構成され、過去の誤りから早くも立ち直り、再び世界に対して正しい責任をとっていく自覚がみなぎっていた。ヨーロッパの民主主義は成熟していた。独仏和解の先達となった社会主義者のロー夫人や、過去を謙虚に見つめ未来を投影する劇を創作した西独青年たち、そこには最も個性の強い人びとによる融和があった。

岐路に立つアフリカのデモクラシーは強い決意に満ちていた。大陸のあるべき姿を描いたナイジェリアの劇は多くの共感を得た。

太洋州のデモクラシーには柔軟性と調和がみられた。アブオリジニー（原住民）の人権の為に闘うキム・ビーズリー元教育相（濠）の姿に、新しい生活様式の先駆けを感じさせた。遠客ラテン・アメリカのデモクラシーには常に独裁との危険に対峙する緊張感があった。ブラジルのスラム街の指導者ペレラ夫妻、チリの労働組合代表の重みは、戦い抜いて得られるデモクラシーの証明でもあった。

アジアのデモクラシーはインドによって代表された。「民主主義は決して貪しい人にとって贅沢ではない。パンと共に自由も大切だ」と表明したインド国民。

人種・言語・宗教・職業を超えてのコーでのデモクラシーの実験。そこでは形式や段取りではなく、個人の参加と責任が不可決であることを教えてくれた。それは又、「何が正しいか」を〝手間ひまかけて〟たどるプロセスの実験でもあった。

世界公共投資基金の構想

―グローバル・インフラストラクチャーファンドの提言―

中島正樹

MRA――道義的再武装――の産業人会議において話をする機会が与えられましたことは、私にとって最上の光栄でありますとともによろこびでもあります。私はこの愛すべき美しいスイスへの訪問が今回で三回目になります。今日皆様とご一緒できることは大変うれしいことでありますが、同時に皆様のように高い理想と固い信念をお持ちの方がたのことを考えますと、非常に責任を感ずる次第であります。

第二次世界大戦後の二十年を通じて、日本と西欧諸国との関係にはほとんどむずかしい問題がありませんでした。特にそれは経済上の問題についていえます。しかしこの二、三年来両者の間に国際収支上のアンバランスが生じて来ました。それを私は「不協和音」と申し上げております。

のちほどその原因について、さらに詳しくお話しいたしますが、このアンバランスは世界的な不況の浸透と石油危機の結果といえます。

ご承知のように、ボンの先進国首脳会議では世界不況の克服と保護貿易の復興をおさえる方法について討議されました。会議は一見順調に終わったと思われます参加した各国首脳は彼等の直面する問題を認識して、それぞれの責任を果たすことを約束しました。

しかしながら私は、世界の各国首脳は最も手近な問題に努力を費やしたので、多くの不確実な問題は残されたままであったと思います。ですから彼等がそれぞれの国に帰ると早速円もマルクもスイスフランもまた値上がりしました。これはドルに対する信用が弱いことの反映ですが、先進国のすべての人達はこの問題の解決に一致協力しなければいけません。

「不協和音」が今日ハイライトを浴びる理由やその経過を考えるに際して、日本の今日の状況について若干の歴史的考察をして見たいと思います。

日本が近代国家の仲間入りをしたのは、わずか百年前のことであります。日本は、古い歴史のある国です。地理的条件の結果、百年前の日本での国際交流はアジアの一部の国――特に中国――とだけ行なわれたにすぎません。その日本が島国であるという環境によって、外国から止され、日本人も本土から出ることを許されませんでした。しかしいわゆる明治維新において明治天皇が即位されるとともに、日本は世界の一国として認められるようになったのです。

維新の直後は日本はまだ未開発の国でした。しかしそこから脱出するのに日本はそんなに長い月日を要しませんでした。中の侵略をも免れることができました。

しかし、これらの恩恵は、日本が世界の進歩から取り残されるという可能性を生じさせたのです。

約百年前、日本はイギリス・・フランス・アメリカ・ロシアの国ぐにから門戸の開放を迫られました。これに先立つ約三世紀の間、日本は鎖国を国策としていたのです。外人は入国を禁進国の時代も半世紀ぐらいの間に卒業しました。第二次世界大戦後約二十年の一九六四年に日本はOECDのメンバーになりました。OECDは先進国クラブであると俗にいわれております。私の考えでは、日本がそのクラブの一員として重要な地位を得ましたことは、社会主義体制国家群と自由社会との経済競争に重要な地位を占めたことを意味するのだと思います。

日本が中進国から先進国へと成長するのはあまりにも早すぎたようであります。先進国クラブの新しいメンバーとして、クラブの空気になれるのにはまだ時間が必要です。東洋の文明の中に育った日本が、西欧のいわゆるコーカサス文明にぴったりと馴染めるのにはまだまだ時間がかかることでしょう。

今日心配されるのは、日本と欧州との一時的なトラブルが保護貿易主義の再誕生となってしまわないかということです。自由世界が存続するためには、こうした不慮の事を避ける道を講じなければなりません。

現在、日本では福田総理を初めとして国民そろってそうしたことの起こらないように最大の努力を続けています。しかし経済問題は一方的には解決できません。当事者同志が互いに譲り合うことによって円満な解決ができるのです。このプロセスが私のいう音楽にたとえて「和声」調和音であります。この目的到達のためには、日本が先進国諸国の現在置かれている重要な状勢について理解することにやぶさかではありません。しかし同時に私達は皆様方にも日本の立

場を理解して下さるようにお願いする次第であります。

まず、日本の貿易収支のアンバランスは最近の問題であります。数年前まで日本は終始、貿易の赤字に悩んでおりました。

ところが、この一世紀の間の日本の発展の背後にあるものは何でありましょうか。簡単にいうならば、日本は海外に何千、何万という留学生を送りました。日本はイギリスから議会制度を、フランスから軍事・芸術を、ドイツから医学を、イタリアから音楽を、オーストリヤから芸術を学んだのであります。世界大戦後はアメリカから経営学・近代産業技術を学びました。日本人すべてが、これらのことを教えて下さった欧米諸国に感謝していることは申し上げるまでもありません。

同時に日本の発展が早かった理由を皆様に知っていただきたいのです。その一つの特色は、日本人には欧米に追いつこうというコンセンサスがあったということです。このコンセンサスは、西欧デモクラシーの個人主義に基づくものではなく、日本人の性格すなわち仏教や儒教や神道の総合の上に立てられた同民族的統一性というグループ社会の構成にあったといえます。

東京の上智大学のグレゴリー・クラーク教授は彼の書いた『日本民族――その特異な性質の根源』の中に非常にすぐれた分析と解明をしております。日本は資源を欠いた小さな国に一億一千万の人間が住んでいます。こうしたことから日本に貿易立国、すなわち海外から原料を買って製品を作りそれを売ることが生存の唯一の道であるというコンセンサスが成立したのであります。

一九七三年の石油ショックは世界に地殻変動ともいえる混乱を引き起こしました。しかしそのショックは日本が最大であったといえましょう。当時日本は年間三億キロの油を輸入していました。日本のエネルギー源の七四%まで石油であり、その石油の九九%は輸入に頼っているのであります。

石油価格の突然の値上がりは年間百五十億ドルの支払いを必要としました。その頃の日本は年間海外収支は平均して十億ドル程度でしたから、石油代金の十五分の一にしかならなかったのです。

この難局を切り抜けるため、日本にナショナルコンセンサスが生まれたことは特筆すべきでしょう。米国から輸入した「消費は美徳」という考えが、わずか一週間から二週間で「節約――貯蓄――は美徳」というふうに早変わりしたのです。企業がそれに急速に転換したのは当然ですが、労働組合の対応も早かったといえます。その頃の年間三十%までのベースアップの傾向が、翌年には十%になり、今年はまた下がって四%になりました。過去において日本は低賃金の国といわれておりましたけれども、今日では日本を百としますとイギリスは六十、フランスは八十三であり、アメリカとの差もほとんどないくらいになりました。こうした動きは日本における労使間のコンセンサスが成立した結果ということができます。現在日本では卸売物価は昨年より下がり、小売物価も四%の上昇ですんでおります。

このような努力は日本の輸出競争力を高めました。石油ショックの年に貿易収支が大きく赤字になったのは当然です。しかし二年後には百五十億ドルの赤字を償うことができたのであります。あるアメリカの友人が、この切り抜けは世界で最も見事なものだったといってくれました。たしかにわれわれが予期した以上のことになりました。もちろんこれ以外にも商品良質化への技術改善を行なったこと、アフターケアも優秀であることなどが経済大国の日本の地位に貢献していることは事実であります。

しかし日本はわれわれの先生である諸国に対して、われわれの感謝という借金を返すという努力に欠けております。欧米諸国の製品をもっと沢山買うという努力が欠けているのです。その上国際収支上の余裕を海外への援助や投資につかうべきです。もちろんそういう議論もされましたが、より一層の努力すなわち日本の輸出優先の方向の再編成、方向転換が遅れていることは事実です。

今年度、日本政府は十二億五千万ドルの緊急輸入を決定しました。今年の予想では二十億ドルに達する見込みです。その上外国政府は日本への輸入の推進に力を入れて、われわれの市場の開発に努めてくれることを期待しています。ジェトロ――日本貿易振興協会――は海外の国ぐにが日本の企業の仕事振りに理解を深めることを援け、日本への輸出増進を行なうために大きな努力をしております。最近は「輸入マーケット」という名の外国商品購売促進の組織を作り、それを東京の中心に置いて海外の公館や貿易機関のためにフラワースペースを設けております。

今から考え直して見ると、長い年月をかけて輸出努力をした結果、ここまで日本は経済大国にのし上がれたのです。突然に輸出を削減することはやさしいことではありません。しかし最近の円の急上昇は、自動車・鉄・機械類の輸出増加率を急速に低下させております。円の計算でいうと、すでに前年に比して赤字となって来ました。

問題は、欧米諸国から買う物が少ないのです。たとえば自動車の例を取り上げてみましょう。日本では大型でしかも右ハンドルの車を売り込むことはむずかしいのです。日本はそれに対して輸出用の車は右ハンドルに改造するという努力をしております。

日本では、外国の製品を舶来

品といって大切にする習慣がまだ残っております。日本が欧米先進国に期待することは、それらの国ぐにが日本への輸入努力をさらに高めてほしいということです。どうか日本の欧米への輸出努力に負けないように、熱を入れてほしいと思います。たとえば外国からも日本の輸出努力を学びにわが国に来ます。しかし、数の上からいって日本から外国へ出かけている輸出担当者と比較しますと、その数はわずか十分の一にしかすぎません。

いずれにしても双方にとって保護貿易主義は十八・十九世紀の重商主義への退歩を意味します。力を入れなければならないのは「調和音」であり、しかもそれは縮少均衡であってはなりません。拡大均衡でなければならないのです。

私に許されました限られた時間内に、二つの問題を提示して皆様のご理解と同時にご批判を賜りたいと思います。

第一の問題は、日本が戦争放棄を憲法で定めた今世紀初めての国家であるということです。それは日本憲法の第九章に定められております。日本は他国との間に紛争が生じても、戦争に訴えないと約束をしました。したがって日本は国策として原子兵器の製造はもとより、保有を禁じております。同時にすべての攻撃的兵器の製造保有を禁じ、さらに世界の国ぐにが戦争をすることを抑制するために、兵器の輸出を全面的に禁止しております。

その憲法は米国占領軍の要求にしたがったものといわれております。日本人の中には日本が全く自主的な憲法を制定すべきだと論じた人も若干おりました。私は、世界中で自発的に「平和憲法」を制定する国はどこにもないと私見として申し上げます。ともかく外国からの要請でなされた憲法でも、このような「平和憲法」を育成して行くことは意義の深いことであります。

ともかく日本のような潜在的な軍事産業国家が戦争を放棄したということは、世界へのチャレンジャーとして意義の深いものと思います。

この平和憲法の存在は、日本自身にとっても恵みを与えてくれるものだといえます。日本の国防費は防衛だけですから、国民総生産に対比して一%にもなりません。ソビエトでは十二%に及んでおります。西欧の主要国の平均は四%前後です。これは日本の国際貿易収支上の大きな恩恵となっております。

特に途上国への積極的な投資をしなければなりません。そのような貢献は日本に対する評価にもプラスとなって反映するでしょう。そしてそれは世界の平和を期待する国民にも答えることになります。

世界への貢献の道として、昨年の暮に発表しました「世界公共投資基金」について、簡単にご紹介してご意見を承りたいと思います。「世界公共投資基金」には、現在の世界の経済不況が各国の国際収支のバランスを崩れさせ、世界不況を招いているという考えが根底にあります。この不況の根底には原子力兵器の抑止力によって人類が全面的な戦争に入るのを不可能にしました。

ダニエル・ベルのいうとおり、戦争で破壊されたものを復興するために、戦争によって開発された技術革新が生かされ、そのおかげで戦後二、三十年間は人類の歴史で初めてといえる繁栄を享受することができたのです。しかし復興は終わりを告げ、技術革新も停滞いたしました。その結果産業は生産過剰に悩み設備投資は全く停滞いたしました。

このような困難な問題を解決するための具体的な方策は、世界的規模における公共投資でないかと私は思います。特に先進国においては投資を必要とする公共投資は種子切れとなって来ましたが、発展途上国にはその種子はいくらでもあります。

発展途上国の飢餓と貧困を救うために、先進国は持っている技術と資金をこれらの国ぐにへ実際に注ぎ込むことが必要です。途上国のGNPを一人当り千ドルに上げることができれば——スイスの十分の一ですが——経済の活動力は年間三兆ドルとなって現在のアメリカの約二倍の新しい市場が形成されることもできるのであります。

このように平和建設のために、世界の国ぐにが大規模な共同の計画を持って、戦争の代替物とすることができれば人類全体の繁栄を取り戻すことができるのであります。その金額は、先進国やオペック諸国の協力に期待し、今世紀末までに五千億ドル位を考えております。

第一次世界大戦の大不況に際して、ケインズのニューディールによって、ある程度の復興ができました。しかし今日ではケインズ流のニューディールが一国の中で行なわれていては、インフレーションを招き、反動としてスタグフレーションが起きてしまいます。ですからニューディールは世界的構想で行なわれるべきであります。

こうした考えは漸次各方面での理解も深まり、日本の福田総理はこのアイデアを今春ワシントンでカーター大統領に持ち出したところ、かなり強い反応があったと福田総理から直接聞きました。

日本が他の先進国などと一緒になって世界の平和に貢献することは、一つの道であると私は思います。

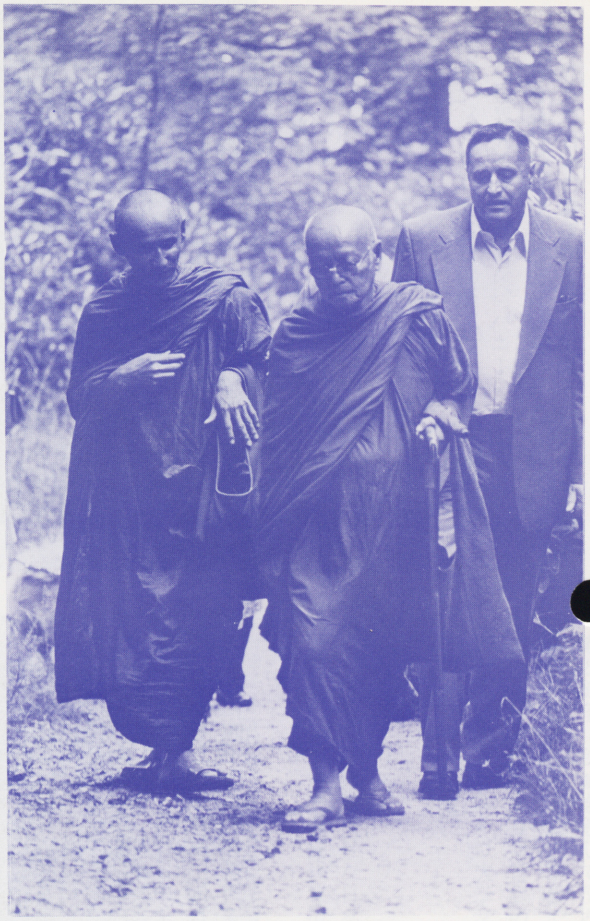
この考えは本日皆様に特に用意しましたパンフレットに簡単に記述されております。皆様のご批判やご忠告を賜りたいと思います。

重ねて本日、このような機会を与えて下さいました皆様に厚く感謝の意を述べさせていただきます。

どうもありがとうございました。

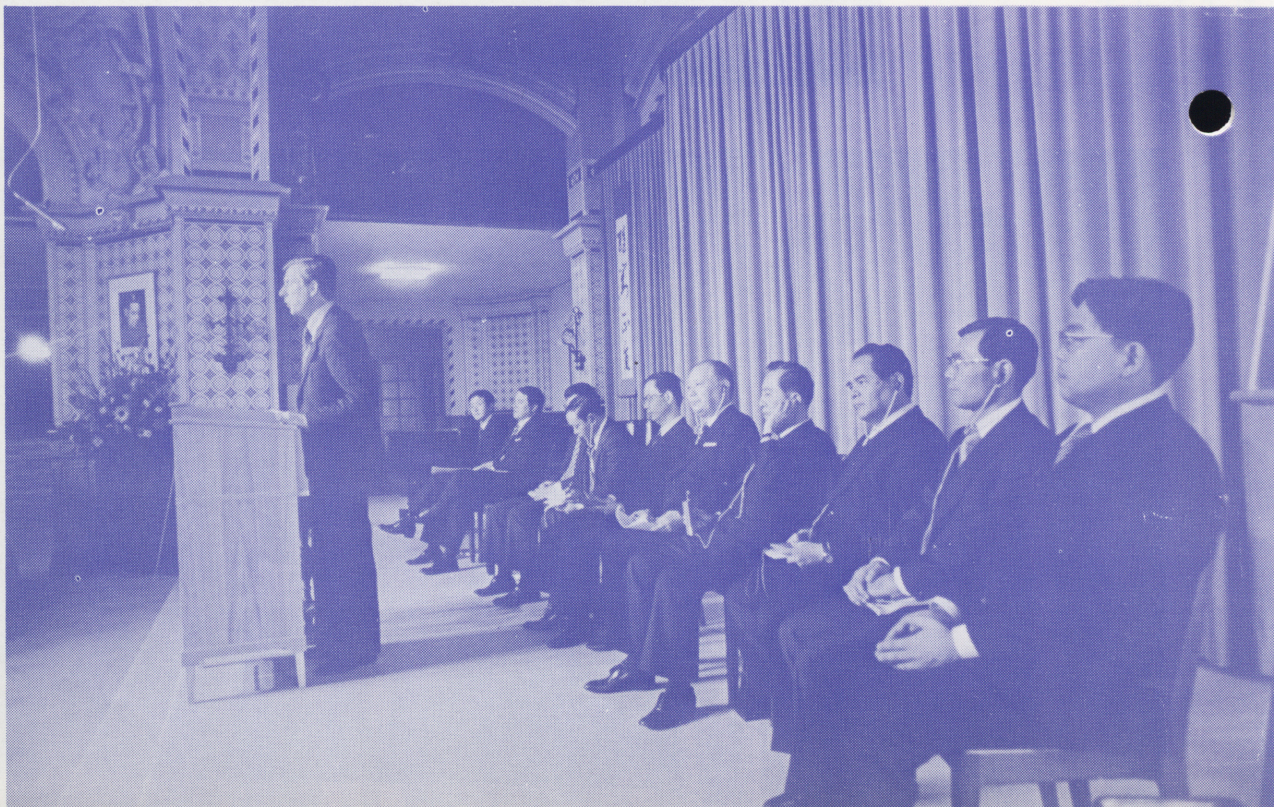
（一九七八年九月コーにて）

1978年
MRA世界大会フォトニュース

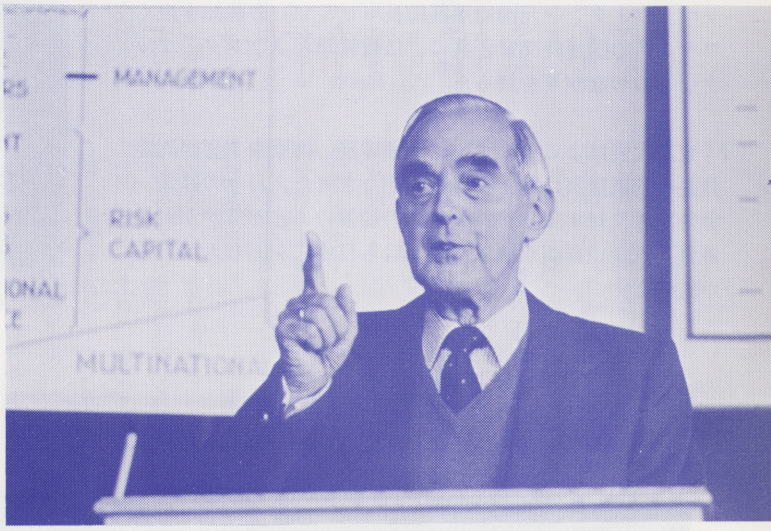


(右)フランクブックマン生誕百年を記念し、フロイデンシュタット（西独）とコーを訪れたタイ国第二の高僧ビマラダンマ。ウ・タント元国連事務総長（ビルマ）の叡知を説くフランスの国連外交官と共に、仏教哲学とフランク・ブックマンのつながりを語った。

(下) 東芝代表によるセミナー。高瀬専務、梅原東芝労組副委員長の基調講演に続き質疑応答がなされた。日本の経営、労使関係に対するヨーロッパ側の勉強のあとがうかがわれる鋭く細かい質問が続き、終了后も日本人を囲む人垣の輪が続いた。



ローデシアのイアン・スミス首相令息アレックス・スミス。かつて彼は父の頭痛の種であったがMRAにあって一転黒人と白人のパイプ役を務め今やアフリカの未来を担う一人。「あなたのプランは第三世界を先進国と対等に考えているところが最も印象的」と、中島正樹氏のセミナーを評価した。



ユーモアも交えて図解入りで「多国籍企業」を説くフィリップス氏。日中条約についても日本代表に質問をなげかけた。同氏は最近「フィリップスと共に四十五年」の著書を刊行した。

イスラエル、メイア元首相の自伝翻訳のため中東からコーの大会に参加した林弘子熊本商大助教授と後藤建設の上野博昭氏、ダンカン・コッコラン氏を囲んでのティータイムの交流。

かつて日本の青年団をはじめ多くの人びとにMRAを通じて〝世界的視野〟を与えてくれたテニスの世界的チャンピオン、バニー・オースチンと愛妻フィリス（著名な女優）の物語りを演ずるイギリスのプロミュージカル俳優ブログデン・ミラーとルース・マドック。

このミュージカル「ラブ・オール」はコーで初演されそのあとロンドンでロングランを続け好評を博している。

（下）「モスクワ行きの留学生は共産主義の暗さに恐怖を感じて反共になりパリ行きの留学生は放縦と随落に幻滅を感じて反西欧になって帰国する。真の自由と民主主義を享受できるトレーニングが欲しい。」というアラブ首脳の意をうけて語る十五万学生を率いるカイロ大学学生委員長とエジプトヨルダン学生代表。

（左）イギリス、パプワニューギニア、オーストラリア等で研修を受けた日本の青年十人がコーに集結して民間外交の先兵を担った。

新会員を増やそうと語る尾関雅則常任理事

1,000人の新会員獲得を目指して……

国際MRA日本協会総会開催さる

秋晴れの九月三十日、東京の半蔵門東条会館で一九七八年MRA世界大会に出席した代表の報告会を兼ねて国際MRA日本協会の第三回総会が開かれた。

開会の辞頭に杉田副会長は先頃永眠された社会党顧問の加藤勘十氏の霊に目とうを捧げたいと発言し、全員目とうのあと次のようにのべられた。

「先日亡くなられた加藤勘十先生は、奥様の加藤シズエ先生と共にMRAによってチェンジされたお一人であります。ご生前の頃MRAの精神に従って、日本の講和問題について社会党は全面講和という方針でありましたが、加藤勘十先生は単独講和ということで社会党の政策に反対されました。またその後もMRAというものに非常にご関心を持たれまして、日本とフィリピンとの関係がまだ正常化されていない時に、マニラにおいでになり日本とフィリピンとの関係正常化の糸口をつくられたのであります。このように加藤シズエ先生と共にMRAに非常にご理解があり、またMRAの精神で終始されたと伺っております。

私もMRAに出会って以来『憎しみを捨てて融合の道を選ばなければならない。人を変えようとするならば自分がまず変わらなければならない。自分の姿が国の姿である。』ということがやっとわかるようになりました。たまたま安保闘争前後に出版されましたMRAの使命について書かれた本の中になかなかよいことが出ておりましたので、私のあいさつとして読ませていただきます。

現在の世界をこのままにしておいてよいと思う人があれば、それはおそろしく利己的な人か、または非常に盲目的な人である。たいていの人は世界を変えたいと思っている。だが、あまりにも多くの人がそれぞれ自分勝手な方法でそれをやろうとしている。そこに問題があるのだ。事態を正しく判断している人々がいるが、それに対する正しい方法を知らない。彼らはその結果混乱を招き、憎しみや戦争を誘発する。またある人々は理論の上では正しい解答を持っているが、自分でやろうとせずにいつでも誰か他の人か他の国が、まず変わり始まるのを待っている。しかし他の人や他の国がなかなか変わらないために、自分がいらいらし絶望感に陥ってしまう。正しい情勢判断と正しい解決方法がそろった時、その結果は偉大な事実となって現われる。その性質が変われば世界の状態も変わってくる。人は何のために生きているのか。またわれわれの国は何のために存在しているのか。利己的な人々、利己的な国は世界を全部破壊してしまう危険がある。われわれが今最も必要としているのは、新しい型の人間・新しい型の政治家・新しい型の政策である。それをつくり出すという使命を持っているのがMRAである。

この混乱の時に言明したことは、今もなおいきいきと生きております。

この総会を契機に、自らを、家庭を、国を、世界の自由と平和を拡大するためにみなさんの決心をお願いいたしまして、私のあいさつを終わらせていただきます。」

次で常任理事の尾関雅則氏（国鉄・常務理事）は危機は静かに近づいているとして日本協会の事業発展のための財政確立について次のように呼びかけた。

「私はかねがね一つの疑問をもっていたが、それが最近、ますます大きくなってきている。MRA運動はたしかに一時期の停滞から脱してすばらしい発展をしている。国際的規模で開かれる産業人会議、スイスのコーで開催される世界大会への代表派遣、毎年開催される各国大会への参加、日本からの研修生の派遣など盛んである。漸やくその実績は認められてきた。各国からの訪問者も今後増加しよう。こうした事業の発展に伴って私は心配でならないのは財政面についてである。現状は極めてお寒い状況である。

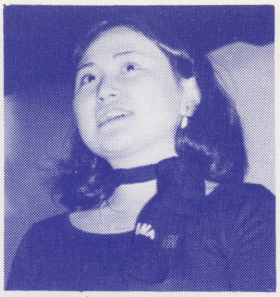
このために私たちは真剣に考えなくてはならないと思う。事業は発展しているが静かに危機は近づいている。私はそれを心から心配している。

現在、われわれ全員がそれぞれ一人の会員を増やすことに努力し、一人がまた他の一人を働らきかけるならば二年間に一千人の会員をつくることができるのではないか。

まず一〇〇〇人の会員獲得を目標に今日から行動を開始したい。」

続いて多数の人びとが相ついで確信と報告をのべられたが、研修生としてオーストラリヤか

らスイス・コーの大会に参加した水戸の市橋佳枝さんは次のように話した。


市橋佳枝さん

私は去年の八月に日本を発ち、一年と一カ月にわたってオーストラリア・イギリス・スイスと廻ってまいりました。この一年を振り返りまして私がMRAを通して特に印象に残ったことをお話したいと思います。

私はオーストラリアでMRAの「効果的な生活」というトレーニングコースに参加しておりました。九カ国から約二十人の参加者があり、みんな一緒に生活をしながら勉強いたしました。そのような生活から私はチームワークの大切さを学びました。そんなある日、ミーティングの席で突然フィリピンの女の子が「私は『バカ』という言葉を知っているのよ。」と話し出しました。なぜなら昔、日本人はフィリピン人に対していつも「バカ」「バカ」という言葉を使っていたからだそうです。そしておばあさんが、「日本人の前では決して頭を深く下げてはいけない。必ず日本人はフィリピン人の頭を後ろからはたくから。」といったそうです。そして韓国の男の子は小学校の先生からも両親からも、「日本人は憎むべき者だ。」「日本人を決して許してはいけない。」と習って来たそうです。この話を聞いていた私は、戦争というものも知らないし何といってよいかわからず困ってしまいました。私は一人の日本人として、「ごめんなさい。」という一言をどうしてもいうことができませんでした。でもこういう体験を振り返って見て、私は一人の日本の若者としてこうした戦争というものを見つめ直さなければいけないなと思いました。

それから私が初めて両親から離れて学んだことがあります。それは父のことです。私は高校に入った頃から父とうまく行きませんでした。もちろん日常会話はしていましたが打ち解けることができず、話し合いになると必ず泣き出してしまったりけんか腰になって父を批判するという状態が続いておりました。オーストラリアに行く前も父にあまり話さず出かけてしまったのです。そして私はスイスへ行った時のある朝ガイダンスを持って、父にそんなことをしてしまったことに対してあやまりの手紙を書こうと思いました。私にとって口先だけの「ごめんなさい」は簡単にいえますけれども、本当にガイダンスを持った時のあやまりの言葉というものはなかなかいうことができませんでした。そしてガイダンスを持ってから三週間後、やっと父に「ごめんなさい」の一言を書いた手紙を出すことができました。そして何日か後、父から「ありがとう」の一言の手紙が届いた時は本当にうれしく思いました。

私はそんな体験を通して、毎日ガイダンスを持つことの大切さ、そしてそのガイダンスを実行する勇気を持つことの大切さを痛感いたしました。毎日の生活に押し流されて、悪いことなんだ、まちがっていることなのだと思っても見て見ぬ振りをしたり、簡単な道の方を選んでしまったりというのが以前の私の生活でした。でもガイダンスを通して、自分を見つめ直し、自分の心に正直になるということをMRAは私に教えてくれました。もうあと戻りはしたくないと思っております。

最後に、私は本当にすばらしい体験を与えて下さった日本のMRAのかたを初め世界各国のMRAのかた、そして私をアーマに送ってくれた私の両親に対して心からお礼をいいたいと思います。

モンセラットさん

私はモンセラット天野と申しまして、去年の十一月にスペインから来日いたしました。私の主人は日本人であり、子供も一人おります。日本での生活は十カ月になります。そして来日してからしばらくの間、私はスペインと日本との違いを〝何が足りないか〟という点で比較をしていたのです。生活という点ではスペインの方が、主人も私も楽しんでいて良かったと思います。日本にまいりましてからいろいろと主人と話し合いましたが、しまいにはけんかになって終わるということが度々ありました。ある日私はふと、コーで会った友人がまだ日本を知らなかった私にいっていた言葉を思い出したのです。「モンセラット、比べないで、ただありがたいと思いなさい。」これを機会に長所を認めないでいた私が悪かったと気が付きました。私はどうして不足のところばかりに目が行っていたのだろうかと考えました。それは気持ちが捉われていたからだということがわかりました。日本へくる前は、独身でしたからとても自由でちょうちょのように楽しんでいました。しかし日本では独身ではありませんから、もうそんなに自由ではなくなっていたのです。故郷にありましては、どこへでも行きたい所へ行って好きなことをしておりました。それはご存知のようにスペインには地震がありませんが、ある日私の母が私に、「もしも地震があってお家がつぶれてしまっても、あなたはお家の下敷きになってしまうようなことはないでしょう。だってあなたはお家にいたことがありませんものね。」といった

ほどです。私にとって家はホテルのようなもので、ただ寝に帰るだけの所でした。

それから日本へ来て環境が変わり、そして長所を見つけようという気持ちに変わってからは、私は自分の生活の中で、買物をしようとお料理をしようと、その良いところを楽しみ、それを心から喜んですることができるようになりました。このようなことは、ほかから与えられるのではなくて、自分の内側から見出して初めて味わえる気持ちであると知りました。そして、それは心構えさえあればいつでもみなさんがそれを必要とする時に見出せるものです。

私は今では日本の生活や自分のありかたを非常に楽しんでおります。そして日本を第二の故郷として愛し始めているということを、みなさんにご報告いたします。

この日、ターリガースのスライドが上映されたあと今回スイスの大会に出席し、世界産業人会議で大きな反響を与えた東芝グループが矢野弘典氏によって紹介され、団長の勤労部次長の清野正氏と東芝労連本社支部執行委員長の細淵清視氏、が挨拶された。また昨年出席した現東芝労連の河野委員長も決意を新たにしたいと力強く語られたが、産業人会議の陰の功労者である勤労部の吉田さん他七名が紹介されて大きな拍手をうけた。

続いて九州協力会のメンバーの鶴賀誠三氏（九州電力研修センター所長）らも紹介され、大会の雰囲気を盛りあげた。

当日はこの他上野博昭氏（後藤建設部長）関西の住友義輝氏夫妻、水戸の星みや子夫人、などの発言もあり、遠く広島から村上斉氏夫妻も久し振りに全員と交歓するなど盛大な総会だった。

福岡から馳けつけた九州協力会の代表たち。向って左端が鶴我誠三氏当協会理事の（九州電力研修センター所長）

向って左から埼玉代表の榊たか子さん（当協会常任理事）、水戸代表の狩野さん（当協会常任理事）市橋静枝さん。

二十年振りでMRAに帰ってきたと喜こぶ村山さんご夫妻。村山さんは日立造船労組委員長のときMRAに合い各国に多くの友人を作った。

MRA家族の輪をひろげる

関西秋の大会報告

住吉研修所正面玄関前に集う関西秋の大会の参加者たち

十月二十一日、二十二日の両日にわたって住友義輝氏夫妻を中心に関西在住の人びとが協力して六甲山を仰ぐ住吉研修所で秋の大会が開かれた。この日、地元の関西地区を始め東京、水戸、福岡の各地区から参加者が集まり、充実した時間の中でMRA家族の絆が固く結ばれた。生尾常任理事と日本サブローの社員の方がたや九州協力会のメンバー、松江市の八幡実さん、ジャスコ、ダイエーからの若い方がたと多彩な顔ぶれだった。そしてオーストラリア及びインドの研修に向う真鍋さん、多良さん、市原さんの心の準備もこの会合を通じてますます強められた。当日の会合に参加された、佐藤さん、沖田さん、太田さん、津崎さんは次のように感想を寄せてこられた。

関西秋の大会に参加して

沖田幸治

二ケ月に一度開かれる大阪住友クラブでの例会では、本当にゆっくりと話し合う時間が足りず、合宿してミーティングが持てないものだろうかとの念願が遂にかなえられ、秋晴れの六甲山麓すばらしい環境に恵まれた住吉研修所での二十四時間集会が実現した。

静かな敬けんな雰囲気の中に充実した時が流れ、東京、水戸、福岡なぞから馳せ参じて下さったゲストの方々からも貴重なガイダンスをいただくことが出来た。次代の責任を担う若い方達を私達のチームからもオーストラリアのトレーニングコースに送り出すことが出来たのも大きな収穫の一つである。

どんな立派なスピーチも、たっぷり時間をかけたミーティングも、私自身が謙虚に心を開き傾聴してこそはじめて強固な確信と共感が得られることを学んだ。地道に永く続けることが本当に尊いのであり、チームワークの大切さ、MRAファミリーとして次々に人の和をつなぎ、輪を拡げてゆくことの楽しさも身をもって体得させていただいた。スイスのコーで多くの方々がチェンジの体験をされるが、ここ住吉にもコーが再現出来たことは本当にうれしい。チェンジは今、その場で、決心一つで出来ることを改めて教えられた。今回の大会の実現に当っては多数の方々の貴重な御努力があったことに感謝したい。残暑厳しい中、近郊の研修所を一つ一つ足を棒にして調べて回られた住友夫人。責任者として万端準備に心をくだかれた住友御夫妻の見事なチームプレー。初参加日本サブロー十七名の皆さんの献身的奉仕。東京、水戸、福岡などチームの方々の温い友情。徳光、兼松、生尾、山内、平沢さん達関西世話人の皆さんのお骨折りに改めてお礼申上げます。

MRAに参加して

太田洋子

十月二十一日にMRAの会に出席させていただき真の心を学びました。

私が神戸に住み十年ほど前に開発された新興住宅地ですので、多くの人々のより合いの中で信じていた人がくずれ去り、信じていたことがひっくり返されていくことがたびたびありました。又民生委員として老人のお世話をすることも多いのですが、ど

うして一つの家庭の中で老若男女がいがみあうのか、理解しにくい場合や、福祉の相談員として話しを伺っているうちに、ほんとうにいやになってしまうことさえあり、最近人間不信に私自身おちいっていたのです。しかし一方ではすばらしい友もたくさんおり、これが「ほんとうだ」と救われるのですが、MRAの精神こそ、私の救いでございます。一人でも多くの友に知らせるべき思いでこれからも会に出席出来るように努めてまいりたく存じます。

MRAに思うこと

津崎仁作

昭和五十三年十月二十一、二十二日の両日私達十七名は、社員研修の一環として、初めて関西MRA大会に参加したのでした。しかし、正直なところ私もMRAという言葉を耳にしたのは昨年のことでしたし、ただ「道徳再武装」と言う事位いしか知りませんでした。大会での真剣な体験報告、そして終始誠実な態度を見て、そこにほのぼのとした心温い心の交流を感じ感動を受けたのでした。私達人間は、ともすると自己中心となり、自分は正しいものであって、相手が間違っていると考え自分というものを省りみるということを忘れ勝ちなものです。洋の東西を問わずその歴史をひもといて見ますと、そこに繰り広げられる人間絵巻、そして親子、兄弟や夫婦がお互いに憎しみあい、傷つけあっている人生ドラマを見る事が出来るのです。それは何故でしょうか、私はやはり言葉や態度に大きな原因があるのではないかと考えます。人間は一人ではこの世に生きていくことは出来ないものです。それなればお互いに良い人間関係の上にたって、相互理解し、協力し合うところに幸福があり、人生を幸福なものとしたいのは誰しもが望むことではないでしょうか。ブックマン博士は、「まず自分を変えよ、自分が変らないでどうして他人を変えることが出来ようか、MRAの平和革命はまず一人一人が自らを変える事によって始まる」と説いておられます。私は考えが変れば、行動が変わり、行動が変われば、その人の話し方が変わる。又自分を変えることによって人間関係が良くなり、相互理解が生まれ、そして協力し合えることによって、真の幸福をもたらし、大きくは世界平和につながるものであると信じています。初めてのMRA、未だよくわかりません。しかし参加された方々の高遠であり謙虚な言葉、そして信じてやまぬ態度が私の胸を打ったことは確かな事実でした。MRAは生き方であり、実践だと思います。

秋季大会に参加して

佐藤健治

「私達は神のヨロイを着て悪魔に立ち向うためにガイダンスを持たねばならない」

「ガイダンス?」

私にはそれが何を意味するのか良くわかりませんでした。

多くの方々がご自分の体験を語られ「相手をチェンジするにはまず自らがチェンジしなければならない」「チェンジするには勇気がいる」と報告されるのを聞いているうちに、私にもその意味がつかめてきたように思いました。つまり、ガイダンスとは、勇気を持ってチェンジする人間をつくるパンのようなものだと。

デール・カーネギーの『道は開ける』の中にも「今日だけは三〇分間は一人で静かに休息する時間を持とう。その間に時には神のことを考えよう。自分の人生に対する正しい認識が得られようから。」という一節があります。

大会の終了した日の夜、私はノートに次のように記しました。

「私は、私自身のガイダンスをこれから持つよう努めよう。」

分科にわかれての集いも貴重な時間だった。

食事のときも話しがはずんで相互の理解が深められた。